いずみ

第二号

狛江第一小学校

いずみ

第二号

若竹

節くれ立ったかぼそい幹と。
太陽の光でも、つめたい雪でも、
思いきりささえている葉と。
しなやかで、
そして、強じんにささえている体。

静かなほほえみの中で、
がっしりと根を張って、
若竹。
たくましく。

狛江第一小学校国語研究部編集

いずみ第二号もくじ

—一　ねん—

—二　ねん—

—三　年—

—四　年—

—五　年—

—六　年—

文集「いずみ」をつづけて出すについて

狛江第一小学校長
高橋義彦

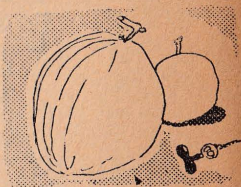
皆さんの努力と、先生方のご協力によって文集「いずみ」第二号が昨年の第一号につづいて、このたび発行されることになったことを、ほんとうにうれしく思います。

こんこんとわきでるいずみ、そしていつまでもにごらずに清らかであるいずみ。狛江第一小学校の皆さんがこのいずみにあやかるようにと念じながら、学校の地名である「いずみ」という名をつけたのでした。

費用が少いために、このたびもわずかなお友だちの文しかのせられませんでしたが、このつぎからは、もっとたくさんの方々の文がのせられるようにしたいと思います。

どうかこの「いずみ」をいつまでも仲のよい友だちとして大切にして下さい。作文の勉強につかうばかりでなく、つかれた時でも、かなしくなった時でも出してよんでごらんなさい。いつも「いずみ」はニコニコして話しかけてくれるでしょう。

1ねん

あかちゃん

いしわたり　たまえ

わたくしは、あかちゃんがだいすきです。うちのあかちゃんは、とてもかわいいのです。あんまりかわいいので、みんなからたいせつにされています。なまえをとも子ちゃんといいます。せんだがやのとものぶくんは、とも子ちゃんがちょっとでもなくと、すぐ、だきにきます。きのうも、わたくしがとものぶくんに、おはなしをしてあげていると、とも子ちゃんがすこしなきました。すると、とものぶくんは、「あっないている。」といって、すぐだきにいきました。わたくしは、くやしくなったので、「とものぶくん、とも子ちゃんが、ちょっとぐらいないたって、いいじゃないの。」とおこりました。とものぶくんは、やっと、とも子ちゃんをねかしたので、あんしんしました。とものぶくんは、とも子ちゃんを、じぶんのうちの人よりよけいかわいがっています。

わたくしも、とものぶくんのように、とも子ちゃんが、だいすきです。

おかあさん

きたはら　なおみ

おかあさんは、とてもふとっています。わたくしが、「なわとびをおしえて、」というと、「いそがしいからだめよ。」といいます。それでも、なんべんもおしえてというと、おかあさんは、しかたなしに、「じゃあ、おしえてあげる。」といって、ものおきからなわを、もってきて、ぴょん、ぴょんと、とんでみせます。とてもじょうずです。わたくしは、どうせ、ふとっているからとべないだろうと、おもっていたのに、とべるのでびっくりしました。

「おかあさん、じょうずね。」とほめると、おかあさんは、「むかしは、てつぼうもやったのよ。」といいました。

おかあさんは、すこしひすてりーです。

わたくしとおとうとと、けんかをすると、おかあさんは、すぐどなりつけます。おかあさんは、おこるときにはこわくても、あそぶときはゆびずもうや、かるたをし

て、あそんでくれます。わたくしは、おとうさんよりおかあさんのほうが、こわいので、おとうさんのほうが、すきです。

ことり

にわ　まこと

ぼくのうちのことりは、とてもおりこうです。ごちそうのなっぱが、かれそうになると、ことりは、みずになっぱをいれます。そして、ぼくの手の上にのります。やわらかいごはんをやると、あみのところまで、こわがらないできて、ごはんをたべます。ときどき、はこからだしてやるけど、にげません。ぼくのうちのことりは、じゅうしまつで、しろいことりです。二わいます。きょうだいで、ふた子です。まだ子どもで、とてもかわいいです。けど、あまりつよくなきません。ぼくがいつも、えさをやりますが、そのときは、うれしそうに、ぴいぴいと、きれいなこえで、なきます。

× × ×

日よう日

なかじま　みえ子

おかあさんのおともだちが、いらっしゃったので、わたくしは、おとうさんたちと、えいがをみにいきました。そうして、わたくしが、かえってきたときには、もうおともだちは、いませんでした。おかあさんは、あみものをしていました。おとうさんが、ひばちのまえにすわると、「おとうさんおちゃをのむ。」と、おかあさんはきいて、おちゃをいれて、ふたりで、てーぶるのまえにすわりました。そうしておとうさんとおかあさんは、おちゃをのみました。おとうさんが、おちゃをのんでしまうと、おかあさんは、また、おとうさんのゆのみぢゃわんのなかにつぎました。

もうすぐ二ねん生

すぎもと　ゆきひろ

ぼくが二ねん生になったら、一ねん生のめんどうを、よくみてあげようと、おもいます。そして二ねん生になったら、いっしょうけんめいべんきょうして、りっぱな

人になります。ぼくのおとうとも、もうすぐ一ねん生になります。ぼくは、おとうとを、かわいがって、おべんきょうを、おしえてあげるつもりです。おとなになるまでめんどうをみてあげます。

ぱーまやさんごっこ

あいざわ　るり

あさおきて、すこしして、ごはんをたべました。すこしして、おともだちのゆり子ちゃんと、いもうとと、三人であそびました。ぱーまやさんごっこをしました。ゆり子ちゃんと、いもうとのみえちゃんは、おきゃくさんです。わたくしはぱーまやさんです。みえちゃんにはくりっぷをしてあげました。すこししていると、くりくりとして、とってもかわいいので、とかしてりぼんをつけてあげました。またともだちのはるみちゃんがきました。すこししてぱーまやさんごっこはやめました。

おとうさん

かよいじ　よしはる

あさおきて、かおをあらって、はをみがいてごはんをたべました。八じょうのへやに、いってみました。おとうさんは、ぐうぐうとねていました。おとうさんのふとんにもぐりこみました。おとうさんがおならをしました。くさいので、ぼくはおこたつにはいりました。きのうはおとうさんのたんじょうびです。おとうさんがかえってくると、ぼくはてーぶれこーどにろくおんしました。おとうさんがおすしをたべおわると、「おめでとう。」といいました。おとうさんはぐんかんまーちのうたをうたいました。ぼくは、はるがきたをうたいました。

まんが

わたなべ　かずよし

きのうてれびで、まんがをやりました。そのだいは「きいぼうくんときゅうこうれっしゃ」というだいです。とてもおもしろそうです。おとうさんに、「おもしろいんでしょ。」ときいたら、おとうさんは、「さあみてみなければわからないね。」とこたえました。さっそくはじまりました。とてもおもしろいです。そこへおとなりの二ねんせいのよし子ちゃんがみにきました。よっちゃんもきました。またうちのえみちゃんやかよちゃんやおきゃくさんがきました。みんなでしずかにみまし

た。とてもおもしろいなあとおもいました。みんなが、「ははは……。」とわらいました。

ひなまつり

こんの　ゆみ子

このあいだからかざってまっていた、おひなまつりがきました。わたくしのうちには大きなおひなさまはありませんが、がくしゅうのふろくのおひなさまや、みんなといっしょに、つくった、おだいりさまをつくえのうえに、ならべて、それにおかあさんがひなあられや、ひしもちや、おせんべなどをきれいに、かざってくれました。おひるからは、あかとしろのおすしを、つくってそなえしてくれました。なんだかおだいりさまがにこにこしているようにみえて、わたくしもうれしくなりました。おとうとも「すごいな。」と大ごえをだしました。きょうは、おとうさんもいるはずですが、おしごとで、でかけていませんので、おかあさんとおとうとと三人でらじおをきいたり、おひなさまのおはなしを、きいてたのしくあそびました。おゆうしょくは、おいしいおすしでした。「きょうは、おんなのこのおせっくで、ゆみこがこんなに大きくなったことを、おいわいする日ですよ。」とおかあさんがいいましたので、ゆみこも、「どうもありがとう。」といいました。

おとうさん

そうま　まさとし

おとうさんは、よくおみやげをかってきてくれます。それでも、おとうさんはいつもよるおそいので、ぼくはあんまりあえません。

あさもおそいのです。ぼくはがっこうへ、はやくいくからです。ときどきはやくかえります。おとうさんは、おこったことがありません。ずいぶん日よう日もどこかにいきます。ぼくはそのときは、たいてい、「日よう日ぐらいは、いたっていいのに。」といいます。それでもいっちゃいます。「それじゃ、おみやげをかってきてね。」といいます。そのときは、「うんうん。」といいますが、かえってきたら、もうわすれています。

ひなまつり

おおやぎ　すみこ

きのうあさおきて、かおをあらって、はをみがいて、お

かあさんが、「すみえちゃんひをおこして。」といいました。わたくしは、「はい。」といってひをおこしました。すこしたつと、おにいちゃんがでてきました。わたくしは、ひをおこしているのに、「どけ。」といいました。わたくしはどいてあげました。てがつかれたのでおにいちゃんと、かわりばんこにひをおこしました。わたくしは、「もうこのくらいでいい。」といいました。おかあさんがひをとっていると、おとうさんがおきてきました。それからおひるごろ、せたのおばさんが、りんごをおみやげにもってきてくださいました。それからおじさんも、まさあきちゃんもきました。

ひなまつり

おかもと　ゆみ子

きょうは、たのしいひなまつりの日です。まえの日に、おかあさんと、おとうさんと、おねえさんが、おひなさまをかざって、くださいました。わたくしは、うれしくなりました。日よう日なので、うちじゅうみんなで、ぶんこうのほうへ、おさんぽに、いきました。とちゅうで、かいしゃの、おとうさんのおともだちに、あったので、かいしゃのおともだちは、かめらをもっていたのでけしきのよいところにいって、しゃしんをうつしてもらいました。

きょうは、ちょうど、こうぞうのおたんじょう日でしたから、うちにかえってから、おふろにはいって、せいようざらで、あかいごはんのなかに、ぐりんぴーすのはいった、ごはんをたべました。きょうは、たのしい日でした。

がくげいかい

はしもと　おさむ

このあいだのがくげいかいで、ぼくはおゆうぎにでました。ぼくは、ぶたいにでたとき、むねがどきどきしました。みんなのかおをみてると、みんなおなじかおばかりで、うちのおかあちゃまは、みつかりませんでした。ぼくは、せんせいのかおばかりみていました。おゆうぎがおわって、ほっとしました。みんなの、げきや、ゆうぎや、うたは、とてもじょうずでした。みんなも、しんけんなかおをして、みていました。がくげいかいをみて、ぼくは、どれもみんなよかったとおもいました。

×　×　×　×

おかあさん

むらくし　しずえ

うちのおかあさんは、せいはたかいのです。そして、やせています。わたくしたちが、ちょっとでもいたずらをすると、かんかんになっておこります。さわいでもおこります。あめの日には、そんなにおこりません。みんなで、でぱーとにいくと、おかあさんはじぶんのものばかりかって、わたくしたちのものを、一つもかってくれません。おかあさんは、よるはたいがい、おこたにはいっています。そして、わたくしたちがねると、おそうじをします。おとうさんが、かいしゃからかえると、おかあさんは、げんかんまで、むかえにいきます。

おかあさん

たかぎ　みよ子

わたしがときどきいうことをきかないと、ときどきおこるときもあります。わたしは、にげていっちゃいます。おかあさんはいつも、いそがしいといって、おこっています。それでも、なんでもうちのおにいちゃんにたのみます。「ちゅうがくのおっちゃんはいうことをきかないからしょうがないわね。」と、わたくしのほうをみていいます。ひばちのひがないとき、「おかあさん、ひをおこして。」と、いうと、「いまはだめだめ、いそがしいんだから。」と、いいながら、しごとをやっています。いつも、「いそがしい、いそがしい。」といいながら、しごとをやっています。「いくらはいても、ちらかってしょうがないわね。」と、わたくしのほうをむいていいます。

うちのあかちゃん

大つか　けい子

うちのあかちゃんは、さち子といいます。わたくしが、まい日がっこうへいくとき、おみおくりしてくれます。わたくしは、がっこうからかえってくるとき、さち子はどうしているかな、と、おもってかえってきます。えんこして、とてもかわいいです。ときどき、ぐずつくけれど、よくねたあとは、きげんがいいです。まい日とてもよくあそびます。ときどき、わたくしはおもりをいたします。そうすると、かみのけをひっぱってしょうがないので、かめのこをきせてあげました。

おとうさん

さかきばら　えみ子

うちのおとうさんは、おとまりのときや、かいしゃからかえってきたときは、いつもおみやげをかってきます。だから、えみ子はうちのおとうさんはだいすきです。それから、かいしゃからかえってくると、すぐえみ子をいっぱいだっこをします。おかあさんにもかばんをかってきたことがありました。

おかあさん

おがた　たけひこ

おかあさんは、五月ごろに、あかちゃんをうむそうだ。ぼくは、うれしくてたまらない。いつうまれるのかたのしみだ。いつか、おかあさんが、ふとんの中でいったっけ、「あかちゃんがうまれたら、なんていうなまえにしたらいいかしら。」ぼくは、「おとこか、おんなか、わからないからだめだよ。」と、いった。おかあさんは、ぼくのことをいつも、「ぼち。」とよんでいる。ぼくは、「おかあさん、ぼちっていうのをやめてよ。」といった。おかあさんは、「でもたけひこがかわいいから、ぼちっていうのを、やめられないの。」そうしておかあさんは、ぼくのことをやめないで、「ぼち、ぼち。」といっいる。おかあさんが、あんまり「ぼち、ぼち。」というので、「ぼちっていうのをやめてよ。」といったら、とうとうやめた。でもぼくは、やっぱりさびしいようなきがする。だけど、ぼちっていわれるのはいやだった。だって、おにいさんになるんですもの。

おつかい

やたべ　かつとし

きょうのあさ、おかあさんが、ぼくに、「パンをかってきて。」といいました。ぼくははじめいやだといった。ぼくは、「おねえさんにいかせば、いいじゃない。」といいました。「だけど、いまおねえさんは、かおを、あらってるじゃないの。」ぼくは、「まあ、いってやる。」といいました。おかあさんは、もういかなくていいといって、おねえさんにたのみました。ぼくがいくといっているのに、いらないとおかあさんは、いいました。「いくらいらないというのにうるさい子だね。」とおかあさんは、いいました。そのうちに、おねえさん

が、かえってきました。それで、ぼくは、あわててパンをたべて、がっこうへきて、かばんをおいてかけようとおもったら、らじおたいそうのおんがくがなっていたので、あわててそとにでていきました。おねえさんとしらないまにぶつかったので、ぶってやりました。おねえさんもぶつかってきました。それで、二人でごめんねといいました。

おかあさん

みやじま　かずお

きょうは、にちようびです。おかあさんもきょうは、おやすみです。おかあさんはぼくを、ゆうえんちに、つれていってくださいました。おかあさんは、ぼくがぶらんこにのっているのをみていらっしゃいました。ぼくは、おかあさんになにか、かってあげたいようなきがしてきました。「またどこかにいきましょう。」とおかあさんがおっしゃいました。ぼくはうれしくなりました。「ほんとうにぼくを、どこかへつれていってくださるのですか。」とききました。「ええ、ほんとうに、どこへでもつれていってあげますよ。」とおかあさんがいいました。「ほんとうにぼくを、どこかにつれていってくれるのですか。」とぼくは、またたずねました。おかあさんは、にこにこしていました。「ええ、どこへでもつれていってあげますよ。どこへいきたいの。」ぼくは、どこへいこうかなとおもいました。そうそ、いいことがある。「おかあさん、どこへいくよりうちにいておりがみをおってあそんだほうがいいでしょう。」とぼくはいいました。「そうしましょう。」とおかあさんは、いいました。ぼくは、はやくうちへかえりたいようなきがしました。「おかあさん、はやくおうちへかえろうよ。」とぼくはいいました。「おかあさんも、かえりたかったのですよ。」とおかあさんは、いいました。そして、おかあさんはにこにこしていました。えきにつきました。ぼくはきっぷをかいました。でんしゃが、がたんがたんと、おとをたててとまりました。「おかあさん、このでんしゃきれいね。」とぼくはいいました。「つぎのえきでおりるのですよ。」とおかあさんがいいました。がたんがたんとおとをだして、でんしゃは、はしりだしました。

おかあさん

やたがい　ひさえ

おかあさんは、びょういんに、にゅういんしています。もうだいたいよくなって、じきにかえれるとおもうけど、それがいつかえれるかわからない。でもそんなにおそくならないで、かえれると、わたしは、おもいます。

わたしは、よるねるとき、いつもおかあさんのことばかりかんがえています。おとうさんが、はたらいているために、ごはんがたべられるのです。わたしは、どんなにうれしいでしょう。そのとき、わたしは、うれしいけど、ときどきおとうさんが、おかあさんがうちにいたとき、おかあさんを、おこるのです。わたしが、おとうさんのことを、「おかあさんは、びょうきだから、おこらないで、かわいがってやらなきゃだめよ。」というの。だって、おかあさんがしぬと、わたしは、かなしいからいうの。二どめのおかあさんだといやだからいうの。二どめのおかあさんだとおっかないからよ。やさしければいいけれど、おっかないと、わたしはとってもかなしくなるからよ。

がくげいかい

くまだ　きよし

「三太のうなぎそうどう」は、おにいちゃんが、おとさんになってでるので、ぼくはどうしても、みたくって、おかあさんにたのんで、みせてもらいました。おにいちゃんが、うなぎをもって、おもしろいかっこうで、おおきなこえで、じょうずにやりました。みんなの人たちも、いっしょうけんめいに、じょうずにやっていました。

ぼくは、うたにでました。でるとき、むねがどきどきしました。でも大きなこえで、いっしょうけんめいに、うたいました。おねえちゃんは、「まいごの子すずめ」にでました。子すずめが、はやくおうちへかえればよいなあとおもって、みていました。

がくげいかい

やました　とおる

きょうはがくげいかい。ぼくたちは、いっしょうけんめいにやったので、おきゃくさんたちは手をたたいてくれました。ぼくたちはうれしくなっていっしょうけんめいやりました。みんなはとてもおもしろそうです。ぼくは、ものぐさたろうと、いなかっぺが一ばんおもしろかった。そのほかいろいろなものをやりました。みんなは、「おもしろいわね。」といいました。ぼくたちの、らいおんとねずみがおわったので、ぼくはおかあさんをまっていました。そしておわりのことばがおわったので、うちにかえって、きょうのおはなしをみんなとしました。

2ねん

水せん

香田かず子

うちのうえ木ばちの、水せんは、おばさんがたいいんして来た時、にわにさいていた水せんをうつして、おばさんのおへやにかざっておきました。そのうえ木ばちの水せんがかわいいめを出したと思ったら、もう十センチものびています。うえ木ばちの土がかわいている時は、じょうろうで水をかけてやります。そうしてやるとうれしそうにぐんぐん水をすいます。のどがかわいている時に、お水がおいしいように水せんもきっとおいしいのでしょう。はれている時は、えんがわの石の上において、お日さまにあてます。もうじき、きれいなお花がさきます。

おとうと

三輪のり子

おとうとはひとしというなまえです。ひとしは、五さいでおしゃまです。わらうとえくぼが二つひっこみます。わたしが学校からかえって来ると、「おねえちゃんがかえって来た。」とよろこびます。わたくしがべんきょうして、こくごの本をよんでいると、おとうとが来て、よむからわからなくなっておこると、「いじわる。」といいます。一人であそんでいる時は一人ごとをいうからしずかでいいです。おにいさんがかえって来ると「にいちゃんおすもうしよう。」といいます。おにいさんが、「うん。」というと、となりのへやでひとしとお、にいさんは、どたんばたんしてうるさくしますと、おかあさんにおこられます。わたくしはおとうとがきかんぼうでにくらしいけれど、一ばんかわいいです。

うちのおとうと

倉橋まつえ

うちのおとうとは、狛江ようちえんへ行っています。かえって来ると、すぐかばんをほってあそびに行きます。あそびからかえって来ると、すぐおやつです。夜のごはんの時は、ぜいたくをいいます。ねる時はすぐけんかをします。いもうとのけをひっぱります。おかあさんが来ますとすぐやめます。おとうとは、「みさお」というなまえです。けい子ちゃんが来ると、「かえれ。」といいます。わたしがおこると、「ごめん、ごめん。」といってにげて行きます。よその人が来るとすぐはしゃぎます。おきゃくさまが来てとまって行くとおきゃくさまとねます。みさおはいたずらっこですがかわいいです。

さくぶん

今井かずひさ

きょう学校でさくぶんを書かせた。ぼくは何を書こうかとかんがえた。はじめに、「おとうさん。」というだいで書こうかなと思った。ぼくはそれにしようとして、わらばんしに書きはじめた。おとうさん　いまいかずひさと、書いた時、先生が、「そろそろ時間が来たようですから、それはおうちで書いて来て下さい。」といいました。ぼくはかみをカバンに入れてかぎをかけました。しんやさんが「おかえりのごあいさつをいたしましょう。」みんながそろって「さようなら。」といいました。ガタガタ、ガタン、ドタン、とつくえをはこんでかんゆうをもらいました。「先生さようなら。」といってきょうしつを出ました。雨がふっていたのでかさをさしました。くり山くんはかさを持ってこなかったので、入れてあげました。かどの所で、「おさいなら。」といってわかれた。早くかえって書こうと思った。「ただいま。」手をあらってパンをたべた。「おかあさん、きょうさくぶんかいて行くの。おとうさんというだいで。」「そう。」「おかあさんがにゅういんしてから、おとうさんのほうがすきになったって書くの。」そしたらおかあさんが、「おかしいよ。」といいました。「じゃあ、しけんの日をかくよ。」といってかきましたが、それもへんだと思ってやめました。

わたくしのおとうさん

大沼はるみ

わたくしのおとうさんは、いまかごしまに行っています。もう一月ぐらい行っています。おとうさんがいないとさびしいです。時々お手がみを書きます。この間こけしをおくってくださいました。わたくしはすぐおにんぎょうのケースの中に入れました。とてもかわいいおにんぎょうです。わたくしは、おとうさんのねまきのひもをあみました。そのつぎにはおにいさんのやみんなにひもをつくりたいと思います。おとうさんがかえったら、おかあさんとおとうさんとみんなで、どこかへ行きたいと

思います。この間おひなさまの日におひなさまをおくってくれると思っていましたからおくってくれないことがわかってがっかりしました。わたくしはおとうさんのゆめばかりみています。はやくおとうさんがかえってくればいいと思っています。

にんぎょう

福田恵美子

わたくしのミルクのみにんぎょうは、いつもいつもミルクをのますと、おしっこをします。わたくしはまい日まい日おむつをとりかえていそがしくてたまりません。この前雪がふった時、ぼうしをかぶせて、マフラーをして、セイターをきせて、そとにつれて行きました。にんぎょうを、雪の上にあるかせてみると、小さな小さな足あとがつきました。雪で小さな雪だるまをつくってにんぎょうにバンザイをさせました。そこへ小いぬが来たので、こいこいをしました。小いぬはおをふりふりそばにやって来ました。わたくしはにんぎょうを、小いぬのせなかに、のせてあるかせましたがすぐにおちてしまいました。

わたしのいもうと

金沢よし子

わたしのいもうとは、まだ赤ちゃんです。だからべんきょうや本をよんでいるといたずらにきます。わたしのいもうとのなまえはしげ子です。しげ子はきかんぼうで、しょうがないのです。そしてしげ子はわたしが学校へいくときはま、「わあん！わあん！」ないてあとをおいます。学校からかえると、「おかえりなさい。」ということを、「ちゃんなさい」といいます。だからしげ子はきかんぼうでも、とてもかわいいのです。だからわたしは、「はい。」といいます。するとしげ子はうれしがって、おどり出します。いもうとのおどりがおもしろいので、おかあさんやおとうさん、それからおつとめをしていないおねえさんと、わたしとが、わらってしまいます。いもうとはきげんがわるいときでも、みんながわらうと、わたしとなかよくなって、よるいっしょにねたりします。わたしはしげ子となかよくしたいと思います。

× × ×

せつぶん

大野良三

せつ分の夕方おかあさんが、まめをいりました。いいにおいが家の中にひろがりました。それをますに入れて夜になるのをまっていました。ますの中には、キャラメルとみかんがはいっています。にいさんが二かいで、「おにはそとふくはうち。」といって、ばらばらとまめをまきました。ぼくはキャラメルをまくのをまってすぐひろいました。こんどは下のへやでぼくのばんです。ぼくはまめをつかんで、「おにはそと。」と、大きな声でまきました。あんまり大きな声であったので、おにはにげて行ったでしょう。おかあさんが、「ふくはうち、といわないとふくのかみさまが入ってこないよ。」といったのでぼくはいそいで、「ふくはうち。」とよびました。いちばんあとにみかんをまいたので、ぼくはまめのますをおいて、いそいでみかんをひろいました。とてもおもしろいまめまきでした。

ねこ

長谷川万里

うちのねこのなまえは。「ちろ」といいます。ちろはときどき、「くしゃん。」とくしゃみをします。わたしはときどき「ちろ」をしかります。それでも「ちろ」はいやなかおをしません。「ちろ」はこたつの中にいつでも入ります。わたしたちがこたつに入って足をおろすと、ふわっとクッションのようなかんじがするので、「ああ！いいきもちだわ。」といって足をぽんぽんとはずませると、「ニャンゴー。」といってのそのそとこたつを出て行きます。ねこでもふまれるのがいやなのでしょう。この間近所のねこといっしょに、にらみあって「うー。」とうなり声をたてました。「ちろ」には一ぴきなかのいいねこがいます。この間もおかあさんがせんたくをしていると、「ちろ」がともだちのねこをうちの中につれてきてあそびました。えんがわをどろ足でよごしたのでおかあさんにしかられました。「ちろ」がしかられると、かわいそうに思いますが、「ちろ」はほんとうにぎょうぎがわるいのでしかたがありません。おにいさんには、あんまりおこられないのですぐ、おにいちゃんのところにい

きます。この間の夕方家の中に入れてもらえないので、えんがわのガラスを「ガラガラ」とあけてはいりました。おにいさんが、「しめてこい。」というと「ちろ」はこわがってあともどりをします。おかあさんやいもうとが、「うちのねこは、ばけねこみたいね。」といいます。「ちろ」は、あけることはできますが、しめることができないのでこまります。

ひなまつり

荒川すみお

うちのおひなさまは、だいりさまからずいしんまであって、ないのは三人じょうごだけです。だいりさまは、男の方がむかって左がわで、女の方が右がわです。三人かんじょは、りょうはしが立っていてまん中がすわっています。五人ばやしは、右がわから、うた、ふえ、つづみ、たいこのじゅんです。ずいしんは、左がわが、うだいじんでおじいさんです。右がわが、さだいじんで、わかい方です。ほかにかざるものは、つづらの大きいのが一つ、小さいのが二つ、たんす、ごしょ車、ひしもち、あられ、ぼんぼり、ももの花、びょうぶ、三めんきょうそしてかみでつくった、たちばなとさくらです。おひるには、おばあさんにのりまきをつくっていただいてたべました。おひるからおかあさんが、えいがにつれていってくれるとおっしゃいましたが、あたまがいたくなるのでやめました。そしておひるから本をよんだりしてあそびました。夜は、おふろにはいってねましたが、いつもより少しおそくなりました。

うちのいぬ

宇佐美けん一

ぼくは、いつもいぬをさんぽさせます。いぬは早く走って止まるとすぐぼくにとびつきます。きょうのあさ、ぼくがいぬごやに行くと、「わん。」となきました。ぼくがくさりをはずすとにがしてくれるのかと思っていっしょうけんめいにくさりをひっぱります。

まい日、いぬにえさをやったり、さんぽにつれていくのがすきになりました。ぼくはこんどから早おきをして、ごはんのせわや、さんぽにつれていって、うんとちょ金してもらって、そのおかねでじてん車をかってもらいます。じてん車をかったら、はんどるにくさりをつないでおつかいをしながらいぬをさんぽさせます。えさをやる時も、おすわりや、いろいろなげいをさせてから、

たべさせるようにしています。

うちのいぬは、りょうけんだから、おとなになったら、くうきじゅうをかって、とりをとるりょうしになりたいと思います。

おつかい

大石ひでき

きのうしんじゅくに行ってようふくや、きれや、かばんをかいました。かえりに、えいがを見ました。だいは「きいろいカラス」と「えんぴつどろぼう」でした。かえってすぐ、くみたてじどう車を作りました。中をあけて見ると、セメダインがないので作れませんでした。あしたかって作ろうと思いました。つぎの日、学校からかえって、じてん車でだぐらにセメダインをかいに行きました。しかし中のきかいがよくわからないので、きかいをとってあそびました。山でじどう車に、どろをつんであそんでいるうちに、はまがとれてなくなりました。はまがなくてはだめなので土の中をさがしましたが見つかりませんでした。じどう車あそびをやめて、おとしあなを作ってあそんでいると、ともだちのけんちゃんが来て。「はんせいかいに出すぞ。」といいました。けんちゃんが、もう一人のともだちをよびに行ったので、ぼくのうちへかくれましたが、あとでいじめられると思って出て来ました。けんちゃんは何もいわなかったのであんしんしました。

おひなかざり

今西ちえ子

おひなさまを、わたくしがかざりました。とてもきれいですが、だいりさまとおひなさまだけなのでつまりません。おばあさんがかってくださったもので、おねえさんのです。わたくしはらい年かってもらいます。おねえさんのおひなさまのところに、わたくしのふろくのおひなさまをかざりました。おかあさんがあられやひしもち、あまざけなどをかざりました。わたくしは、たのしいひなかざりができたと思いました。わたくしの、おとうとは、とてもいたずらですが、それでもおひなさまをかざったらとてもよろこんでいるようでした。らい年おひなさまをかってもらったら、おとうとにも見せてあげたり、かざるのもてつだってもらって、もっともっとおとうとをよろこばせてあげたいと思います。

うんどうかい

石原和子

うんどうかいの日、六年生のときょうそうがありました。家のにいちゃんは六年なのでやりました。

おにいちゃんは、はしごをくぐったりするきょうそうでは、あたまをぶつけてしまったので、びりになりました。あとのときょうそうは一ちゃくでした。おにいちゃんはわたしとおなじに赤です。おにいちゃまのときょうそうは、はじめはしごをくぐって、つぎはあみをくぐって、そのつぎは長いぼうの上を走って、そのつぎはおにいちゃまの大すきなでんぐりがえしでした。おにいちゃまは小学校三年の時からすきでした。はしごくぐりもとくいです。あみくぐりはとてもじょうずでようちえんのときもあみくぐりがすきです。

おうちにおにいちゃまのうんどうかいのあみがあります。おにいちゃまはおうちでもじぶんのおとこをひいてでんぐりがえしをします。

うんどうかい

下瀬二郎

ぼくはうんどうかいの日に二とうをとりました。ぼくはいままでのうんどうかいに一ども二とうや一とうをとらなかったのでこんどのうんどうかいの日には、がんばろうと思ったので二とうになりました。ぼくは二くみの人とかけるとき、「おまえなんかぬかしちゃうぞ。」といったのです。ぼくのぬかされた人は三くみか四くみの白の人にぬかされたのだと思います。二くみの「おまえなんかぬかしちゃうぞ」といった人は三とうか四とうかびりです。ぼくよりおそかったので、「やっぱりぬかされなかったね。」というと二くみの人は、にやりにやりとわらいがおです。ぼくはおもいっきりかけたので二とうになったのだと思います。

このつぎのうんどうかいには思いっきり走って一とうをとります。だけどぼくはあしがおそいからびりになるかわかりません。どうせびりならびりでもみんなが見ているからおもいっきり走らないとはずかしいです。ぼくがまけたってぼくのおにいさんやおねえさんの方がぜんぜんおそいからすこしはずかしいけれどあんまりはずかしくないです。ぼくのおねえさんやおにいさんだって、うんどうかいの時はまいねんびりです。

うんどうかい

山下哲平

ぼくはうんどうかいでやったきばせんが一ばんおもしろかったです。どうしてかというとれんしゅうの時は、赤がこてんこてんにやられたのに、ほんとうのうんどうかいの日は、赤が二かい目も一かい目もかったからです。ぼくはこんどのうんどうかいの日も赤がかてばいいと思います。だから見ている時も赤かてっとどなりたいのですが、大ぜいの人がいるところです。だからそんな大きい声をたてられないので、まい日赤がまけると思ってむねがどきどきします。だからときどき、「赤かてっ。」とちいさな声でいいます。だけど赤がまけるときがあるので、ときどきしゃくにさわります。だけどしゃくにさわるのをがまんする時があります。

ひなまつり

住谷けい子

ひなまつりのあさ、わたくしはすぐおきてみどりほいくえんにおゆうぎかいがあるのでみんなきれいなようふくをきています。わたくしの家のいもうども、きれいなフレイヤーのワンピースをきておしゃれです。わたしのおかあさんは「先に行っているわね」といいました。わたしは「はい。あとから行くわね」といいました。わたしはくつしたをはいて、くつをはきました。そしていそいで行きました。

げんかんを入ろうとした時、おかあさんがいましたのでそっとあがっておかあさんのうしろに行きました。おかあさんはようちえんの先生とはなしていました。おかあさんがせきにはいろうとした時わたくしが「わあ」とおどかしました。おかあさんは、わらって「あなたにおどろいていてはたまりませんよ。」といいました。

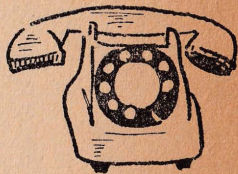
プログラムを見るとはじめのことば……ふじぐみと書いてありました。はじめのことばは、たかたさんです。そしてがっきもやりました。ダンスもやりました。いもうとのかず子は、おしゃれのからすをやりました。そしてたのしい一日をすごしました。

にっきをつけましょう

へんしゅうぶから

あなたはまい日いろいろのことをやっているでしょう。あなたがやったり、おもったりしたことをねるまえに、ちょうめんに書いてみませんか。まい日かいたことがたくさんたまって、それをあとでよんでみるととてもたのしいし、まい日がほんとにうれしくなることでしょう。

3ねん

わたくしのうちのみいこ

箕輪純江

わたくしのうちのねこの名まえはみいこです。おととしの春にもらってきました。みいこは、はじめて四月二十九日に子どもをうみました。おとうさんは「こんな日に子どもをうむなんて、おめでたいね。」といいました。わたくしもそうだなあと思いました。それからしばらくしてみんなあげてしまいました。そして去年の八月に、また子どもをうみました。その中の一ぴきはしんでしまいました。また子ねこが大きくなったのであげてしまいました。そのうちの一ぴきはおばあさんのうちへあげるとすこしたってから、「おなかをこわしたからあずかって下さい。」といったので、いまでもあずかってあげています。はじめて子ねこをみいこにみせたとき、みいはものすごくよろこびました。それからはみいはとかげや虫をつかまえてくるとまっさきに子ねこをよびます。そして虫やとかげを二ひきでいっしょにたべます。今では子ねこはだいぶ大きくなりました。子ねこの名まえもみいこなので、おやをよぶ時も子ねこをよぶ時も「みい、みい。」とよびます。みいこはいつも「みい」とよんでいるので自分がみいという名まえだと思っているとわたくしは思っています。みいはとてもおりこうです。どこにいても「みい、みい。」とよぶとすぐにとんできます。子ねこもおりこうです。けれども、ふすまをひっかいたりすることもあります。わたくしはみいこがとても大すきです。ときどきわたくしのおふとんへ入ってきます。おとうさんは、「ふとんにねこを入れちゃいけない。」といっていますがわたくしはそっとふとんをもちあげて入れてあげます。わたくしはみいがもっと、もっと、おりこうに、子ねこもおりこうになるとよいと思っています。

春が来る

平井純子

もうすぐたのしい　はるがくる。
はるは　さくらが　きれいにさく。
ことりも、ピイチクさえずり出す。
野原には、いちめんに　花がさく。
つくしも、にっこり、かおを出す。
山に行けば　ことりもとんでいる。
小川にいけば　めだかも　ふなも
いろいろな　さかなが　およいで
ちょうちょも　たかく　ひらひら飛んで
みんなも　たのしく　あそんでる。

げんきで　たのしく　あそんでる。
だから、はるってたのしいものだ。

とけい

谷津田みどり

とけいがカチカチうごいてる。
とけいは、いつも休みなし。
みじかいはりとながいはり、
毎日いっしょうけんめい
おにごっこ
とけいがカチカチおどってる。
カチカチカチカチよんでいる。
とけいは朝からばんまで
はたらいて、
みんなのためにやくにたつ。
カチカチカチカチカチカッチンナ。

わたしはえんぴつです

大久保美奈子

わたしはえんぴつです。わたしは赤い洋服をきています。わたしのご主人の美奈子さんはわたしをだいじにしてくれますが、ただ一つこまることは、わたしをけずる時、でこぼこにけずられてしまうことです。それにたまには、くびのほねをおられてしまいますが、またつけてくれます。ほねをおられたときわたしはないていましたが美奈子さんにはきこえないらしくてすましています。わたしは毎日ほそ長い家に入っています。だけどうちがセルロイドなので三年もたつとぼろぼろになってしまいます。このあいだ美奈子さんが、おかあさんにこういっていました。「ねえ、おかあさんこんど四年生になる時、あたらしいふでばこを買ってちょうだい。」と言っているのを、きいてわたしはうれしくなりました。

わたしはたまです

多賀佳子

わたしはねこのたまです。わたしはとても紙がすきです。ときどきお店のちり紙をつめでひっつかんで、この家のご主人にしかられます。わたしが外に出ると、いたずらっこのたかしちゃんがおいかけて来て、わたしをつかまえようとします。ごはんの時など、たかしちゃんはわたしのすきな物を見せて、わたしが、「くれるの、にゃあ」となくとたか ちゃんが食べてしまいます。わたしは「いやだわ」と思います。佳子ちゃんはときどきわたしと遊んでくれます。夜などわたしが家へ入れないで首のすずを「ちりちり」とふると、佳子さんが「あっ、たまだ。たまだ。」といってあけてくれます。佳子さんが学校からかえってくると、わたしがよろこんで「おかえりなさい。にゃ

あ。」というと「たま、ただいま」といって頭をなでてくれます。夜ねる時、たかしちゃんが「たまたま」。といってわたしをだいてねてくれます。あたたかくて、よい気持です。

にわとり

瀬之口二郎

ぼくの、家には、にわとりが二わいます。えさは、おかあさんと、おねえさんです。ぼくはときどき水をとりかえてあげます。このごろは、たまごをうむので、たのしみですが、それまではちっともたまごをうみません。たかちゃんの家のは三日四日に、ひなが五わかえりました。となりのおねえさんが、ひよこをほしいと言いました。ぼくが「たかちゃんの家のひよこをもらえばいいのに」といったら、おかあさんが「くれませんよ。」といいました。ぼくの家の、にわとりとたかちゃんの家のにわとりはきょうだいですから、ぼくの家のもそのうちに、たまごをだくでしょう。だから、たまごは、たべられません。かわいいひよこがかえったら、おねえさんにも、あげたいと思います。

もうすぐ四年生

五十嵐修

ぼくは、早く四年生になりたくてたまりません。四年生になるのは、さくらの花がさくころです。四年生になって新しくふえる勉強はローマ字です。ぼくはローマ字はしりませんけど、いっしょうけんめいになっておぼえます。そしてしたいことは地図をうつしたり、ローマ字をかいたり、そのほかいろいろなことをしたいのです。それに学年が一年上に上がります。それでとてもうれしいのです。でもわからないもんだいがたくさんあるでしょうがねっ心に勉強をしてがんばります。今までは、三十分ぐらい勉強しましたが、四年生になってからは一時間ぐらいしたいと思います。

だから四年生が早く来ればよいと思います。

たのしい春

谷田部正仁

春はとても楽しいきせつです。もものせっく。しゅうぎょう式。一年生の入学、お花見。いろいろ楽しいことのあるきせつです。三年生もあと少しで終ります。家のうめの花が所々さいています。早おきのうぐいすがぼくのねむっている窓のすぐそばで「ホウホケキョ」と鳴いてねぼうのぼくをおこしてくれます。うぐいすの声はとてもきれいです。もうすぐ四年生です。四年生になるとお友だちのおとうとや、いもうとがたくさん一年生に入学します。ぼくは一年生が入ったら、しんせつにしようと思います。春は、ほんとうに楽しいきせつです。

ふとんたたみ

高木克枝

わたしは、まい朝五時半ごろおきます。おばあちゃまは、いつも一番早くおきてごはんのしたくやせんたくなどしています。わたくしは、ふとんたたみをします。かやはたためないので、おとうさまか、おかあさまにたたんでいただきます。まず一番上のかけぶとんをたたみます。かけぶとんは、うらがえしにして一番さきに横に折ってから、たてにおりました。そうすると四つになりました。次に毛ふをたたみました。毛ふは八つぐらいまでおれます。たたんだ毛ふをもつとすぐひらいてしまいます。今度はかけぶとんです。わたくしのかけぶとんは、おばあちゃまのおふるです。しきふは、ちゃんとしきぶとんにかぶせてあります。はじめ二つに折ったらおかあさまが「三つに折らないと、おし入れが小さいからはいらないわよ。」とおっしゃったので、わたくしは三つにおりました。おとうさまがおきていらっしゃって、かやもたたんでくださいました。よく見ているととてもかんたんです。金のわが動かすと、ちりんちりんとなります。おかあさまが「もうふとんがたためるようになったのね。」とほめてくださいました。わたくしは、あしたから、かやもたたんで見たいなあ、と思いました。

たいのうら

青柳光宏

海に来てから、六日目、船にのって、たいのうらに行きました。ぼくは、左がわのせきにすわりました。港からでて、五分ぐらいたちました。たいが、何十ぴきと船に近よって来ました。たいは、左がわの方にしかあつまって来ません。お客さんたちは、どっと左がわの方によって来ました。船がぐうっと、かたむきました。ぼくは船のそこにかくれました。今にも船が、しずみそうになった時、せんどうさんが、「この船は二十人や三十人ぐらいでしずむ船じゃあねえぞ」。といばっていいました。ぼくはそうっと目だけ船の上に出しました。なまずみたいなたいがすごく集っています。かおはなまずにそっくり、ひげが長くてからだが、すごく大きいです。少したってから、船はぎゃくもどりをしました。船は、港の方にむかって走っています。ぼくはほっとしました。港についてから、たんじょう寺に行きました。

グローブ

橋本誠一

ぼくは　グローブを買ってもらった。
うれしくて　うれしくて　たまらない。

ぼくは　山下くんをつれてきて、
たまの投げっこをした。
山下くんが、「少しはうまくなったなあ。」
と、いった。
あくる日　グローブを学校にもっていった。
みんなが　ぼくのそばによって来て、
「そのグローブいくらした。」と聞いた。
ぼくは、とくいになって「千円だよ。」
と、こたえた。

野球

沢　佳　男

ぼくは　野球をやった。
ぼくは、二かい　バッターになった。
始めは　ノックをした。
二かい目は、青柳君に　投げてもらって
うった。
力　一ぱい　うった。
細野くんたちが遊んでいる方に　とんだ
ぼくは　びっくりした。
でも　球はあたらなかった。
細野くんは　びっくりしたらしく
首を　ひっこめた。

たばこのすきなおばあさん

吉　田　澄　枝

家のおばあちゃんは、たばこを、すいます。たいてい、おせんたくのとちゅうで「どれ一ぷくしようかな」。といいます。そしてたばこをすいます。そしてたばこをすうと、口からも、はなからも、けむりが出ます。わたくしはときどきどうして、はなから、けむりが出るのかなあと、ふしぎに思うことがあります。たばこをすうと、「どれせんたくをつづけようかな、どっこいしょ」。といいます。わたくしはどうして「どっこいしょ」というのかふしぎでたまりません。この間、中野さんという家へ、おるすばんに行った時、おばあちゃんは、朝早くおきて「すみえのあたま、ゆうんでしょ、だから早くおきなさい」。といいました。わたくしはおきて、ねまきをとりかえました。おばあさんが「ねまきは、きちんとたたみなさい」。といいました。その時もおばあさんはたばこをすっていました。わたくしは、またはなのあなからけむりを出すんだなと、思いました。

くれ

天　野　朋　子

くれは、とてもいそがしいと、おかあさんがいっていた。すぐお正月がくるからだ。手つだうのはいやだし、てつだわなければおこられる。おかあさんの作ったごちそうを、かたっぱしからあじみしてしまうのも、わたし。そんなにあじみしても、あまるくせに、がみがみおかあさんはおこる。おかあさんは、おうちの中をきれいにそうじする。ぞうきんがけをすると、おとうとが「おうま、はいはい」。とおかあさんのせ中の上にのる。かびんには、きれいな花をいける。昼間、わたしとおかあさんと、川へガラスをあらいに行ったっけ。うちのおじゅうばこは小さいから、ごちそうは、いろいろなしゅるいを、ちょっと作る。年こしそばをかってきて、いよいよあしたがお正月。うちの中がきれいになったら、なんだかうちがあたらしくなったようで、すうっとするみたい。にしめや、きんとんを、じゅうばこへつめた。年こしそばをかっても、一人もたべない。わたしだってたべたくない。三つもかってあるのに、だれもたべない。だいじょうぶかな。のこして、じょやのかねをきいてねた。あしたはうれしいお正月。

うちのみいこ

島　袋　栄　一

うちのみいこは、もう生まれてから一年半たちました。うちのおかあさんは、ねこが大っきらいです。ぼくは、夜そうっとみいことねました。みいこは、ふとんの中でぐうぐういっています。朝おきてみたら、みいこはもうおきて、おかってにいっていました。ぼくが、かおをあらってからいってみると、みいこはどこかに行っていました。十一月に、かわいい赤ちゃんをうみました。みいこの赤ちゃんはぜんぶ死にました。おはかにうめました。そのころ、みいこは、おはかの前でみいみいないていましたが、いまは元気です。

じゅうしまつ

林　健　彦

おとなりのおばさんが、おかあさんに、「うちでは、じゅうしまつがたくさんいますから、二羽あげましょうか」。「はあ子供が大すきですから、おたくでよかったら、いただいてもいいですよ」。などと話していた。ぼくは、おかあさんにそのことを聞いて、うれしくてしかたがなかった。急いでのこぎりと、とんかちを持ってきて箱を作ろうと思ったが、自分では作れないので、おとうさんにたのんだ。作った箱に、じゅうしまつを入れてあげると、まだなれないせいか、すの中に入って小さくなっていた。えさをたべていても人が来ると、すぐにげてすの中へ入った。夜さむいので、箱のまわりにふろしきをかけてあげた。

朝早くおきて、ようすを見に行くと、じゅうしまつは、元気に、「ピーピー」とないてはばたきをした。「じゅうしまつくん、オハヨウ」。というと、じゅうしまつは、後を向いてふんをした。ぼくは「ウフッ。」とわらって、水をとりかえてやった。じゅうしまつは、七時にねて、五時半ごろおきるのだか

ら、ずいぶん早ね早おきだ。お天気のいい日に、ぬれえんに出してやると、大よろこびでとびまわる。初めて箱に入れた時からくらべて、とてもなれてきたようだ。えさを食べている時、金あみをたたいても、平気でたべている。ぼくは早くじゅうしまつがたまごをうんで、子供が生まれないかと、待ちどおしくてたまらない。

おひなさま

松本桂子

きょうは、学校から帰ったら、おひなさまをかざるつもりでした。でも、おかあさんが、「たいへんだからやめましょう」といったので、わたくしは「いやだ、いやだ」。とむりやりにださせてしまいました。おかあさんがだいをして、高いところにのっているおひなさまを、つぎつぎにおろしました。わたくしが下にいてそのおひなさまをうけとりました。しらないで八じょうに持って行ってしまったら、おかあさんがおりてきて、「どうも早いと思ったら、こんなところにおいて」。としかられてしまいました。それでまた一つずつろうかにもっていきました。おかあさんがはたきではたいたのから、「これがおひめさま、これがおひめさま」。といいながらあけていきました。これはうだいじん、さだいじんかと思っていたら、おひめさまとだいりさまでした。わたくしは、いろいろなところをいじくってみました。それから三人かんじょや、五人ばやしや、ガラスに入っているおじいさん、おばあさんなど、いろいろありました。ぜんぶかざってみたら一番おひめさまが、きれいでした。

四年

いわれていやなこと

坂井陽子

わたくしは、南さんや磯貝さんや、中島さんたちに「きゅうかん鳥とか、おかめ、いんこ」などと言われる。わたくしが聞いてあまり気持よくはない。だから言ってもらいたくない。二組の男の子たちは、「さかいしゅんじとか、でぶ」という。わたくしはふとっているからしょうがないが、だけどわたくしはそんなこと言われるのは、はずかしくていやになってしまう。ですからわたくしは、「スマートになりたいな」と思う時が何度もある。学校でも体重の勉強をやって、グラフの時など、一番多い所は、「坂井さん……」。とみんながいうからわたくしははずかしくなるので、体重の勉強は大きらいだ。

ぼくのつらいこと

南克尚

ぼくの家では、去年のくれけんちくして、かんばんをあげました。「ひょっとこ」のかんばんをあげました。ひょっとこは火のかみ様というので、ねんりょうにかんけいあるのでつけました。友だちはぼくとけんかをすると、「ひょっとこべい」「ひょっとこべい」といってぼくをばかにします。ぼくはどうしてこんなかんばんをあげたのかなあと思ってみんなからいわれるたびにかなしくなります。先生、いわないようにしてください、おねがいします。

人にいわれてつらいこと

西堀裕子

よく終りの会の時、人は自分のことが、だされると、なんだかこわいような気がします。でも、わたくしがだされるようなことをしたかもしれない、それから先生に、おこられる時もなんだかいやな気がします。そして、いじわるな子供たちは、わたくしのことを「きつね」と、いうので、わたくしはいやでなりません。わたくしの目、そんなに、きつねににているかしらと思う時があります。わたくしより、ひで子ちゃんの方が、きつねににているような気がします。本校の子供たちは、よくいいます。それから社会科の時間の時、にっぽりとかいうと、すぐわたくしの顔を見ます。

わたくしのこと

須田静江

わたくしは勉強がすすまない。
わたくしはこくごのかんじがわからない。
わたくしはさんすうのことがわからない。
わたくしはいっしょうけんめいにやろうとしようとする。
わたくしはしゃかいがすこしわかってきた。
わたくしの組はとてもいい組だ。
自分のわけがわからない。
自分のおもうようにかけない。
わたくしは学校から帰って勉強がおぼえていない。
わたくしは勉強がきらいだ。

ぼくのこと

林和敏

ぼくはねこぜである。
よく家でも、
せなかをまっすぐにして
あるきなさい。

といわれる。
ねこぜはおとうさんに
にたらしい。
はがわるいのも
おとうさんににたらしい。
おとうさんに
にたのは
へんなのばかりだ。
じがへたなのは
おかあさんに
にたらしい。
ぼくのおやゆずりは
へんなのばっかりある。

わたくし

石井壽子

わたしはどうして色がくろいんだ。
おまけにおてんばだ。
だけどどうして、
入形やこけしが、
すきなんだろ。
べんきょうはきらいだから、
しゅくだいのほかは
めったにやらない。
からおこられる。
ケチで自分の
お金はつかわない。
おしゃべりでなんでも
いってしまうわたし。

おかあさんの病気

大坪文江

おかあさんは、一月四日からけつあつの病気でずっとねています。おかあさんは飯田病院に一日おきに行って、けつあつをはかって来ます。一月四日には二百二十もけつあつが上がったので、家の人や近所の人もしんぱいしていました。でもおい者に行っているうちに、だんだんさがってきました。おかあさんも、「さがってきてよかった。」と、うれしそうでした。このあいだの夜、わたくしとおにいちゃんとけんかをした時、おかあさんはおこって「けつあつが高くなってきたよ。」といいました。わたくしとおにいちゃんはびっくりして、すぐやめました。そのうち、おかあさんの口びるがぶるぶるふるえてきました。わたくしはむねがどきどきしてきました。大きいおにいちゃんが、ざい木屋さんの電話をかりて、飯田病院に電話をかけました。すこしたって、おにいちゃんは「すぐくるっていっていた。」といいながら帰ってきました。すこしたって飯田先生がいらっしゃいました。先生の顔を見てわたくしはすこしほっとしました。先生はけつあつをはかってから、ちゅうしゃを二本して下さいました。飯田先生が帰ってから、おかあさんはすぐねましたので、わたくしもねようとしましたら、げんかんの戸があいておとうさんが帰ってきました。わたくしはふとんの上に起きて、おとうさんにおかあさんのことをはなしました。わたくしはたくさんしかられると思いましたけど、おとうさんは、「これから気をつけるんだよ。」といっただけで、すぐおかあさんのまくらもとにすわりました。それから二日ぐらいたって、うちの前のおばさんが、「多摩川病院がとてもいいですよ。」とおしえてくれましたので、おかあさんは月曜日と水曜日に多摩川病院に行くことになりました。この頃はおかあさんは前よりも顔色がよくなってきました。でも多摩川病院の院長先生が「やさいものやくだものきりたべてはいけません。」とおっしゃったので、お肉やお魚や、からいものはたべられません。きのうの夕飯はカレーライスでしたが、おかあさんはカレーライスをたべないで、やさいをたべていました。わたくしはなんだかおかあさんがかわいそうで、はやくなおって、おいしいものをたくさんたべさせてあげたいなと思いました。

雪の日曜日

田中俊一

きょうはおとうさんと練習帳を買いに行くやくそくでしたが、雪が降ったので行けなくなりました。ぼくはざんねんでしたがしかたがありません。外はとても寒いのであきらめました。近くの鉄ちゃんがきたのでいっしょにあそびました。雪をかためて水をかけてすべりました。ぼくの長ぐつはあまりへっていないので、すべってもぼこぼこ長ぐつのあとがついてしまってすべれません。鉄ちゃんのはよくへっているので、つるつるとよくすべります。すこしたってから、鉄ちゃんがうちに帰るといいだしたので、わかれました。あそんでいる時は暑かったのに、うちにはいってみるととても寒いので、すぐこたつにはいりました。おとうさんは本を見ていました。ぼくが外であそんでいる時、おかあさんはお使いにいってまだかえってきません。ぼくはおとうさんに、「おなかがすいちゃった。」といいました。おとうさんが、「とだなにおしるこが入っているからだしておあがり。」といったので、れんたんひばちの上におしるこが入っているなべをのせました。おなべの中をのぞいているとごとごと音がして来ました。とてもあまいにおいがします。ぼくはお茶わんを持って来ておとうさんにもおしるこをついであげました。おしるこをたべ終ってもおかあさんは帰って来ません。あまりおそいので、ひょっとするとおかあさんはお友だちと映画を見にいったのかなと思っていました。たいくつなので、ぼくも本を見ていました　しばらくたってから、やっとおかあさんが帰ってきました。ぼくが、「おかあさんどこへいったの。」ときいたら、「けいとやさんでこたつにあたっていたのよ。おそくて俊ちゃんさびしかったでしょ。」といいまし

た。おとうさんが「おかあさんはいいごみぶんですね。」といいましたので、おかあさんはわらいました。

ひなたぼっこ

岡本美知子

きょうは日曜日、
お昼のごはんもすんで、
ぽかぽかと暖い風さがり、
にいさんは勉強をしている。
わたしはおえんがわで、
人形のようふくをぬっている。
おかあさんは新聞にむちゅうだ。
ラジオは子供のうたをうたっている。
ぶん鳥の太郎がぴしゃぴしゃ水をあびた。
あたたかいなあ。

読書日記

谷田部正一

ぼくは、二月二日に、世界一、日本一という本を読んだ。バチカン帝国という国はないと思っていたが、どんどん読んでいくと、人口が千人ぐらいと書いてあった。そこで、ぼくは、工場はそんな人口では、なかなか発展しないだろうと思った。また、世界の人口は、二十数億もあるそうです。そのうち、中国がおよそ、四億六千万人いるそうです。もし、この人口が日本の人口だとすれば、東京なんか、交通がはげしくて、交通じこが多くて、病院はこんで、まだ治りかけの人も、病院から出ていくようになると思った。

栗原繁

ぼくは、図書館で、物語世界歴史を読むことにした。神の使者とされ、絶体的な力をもっていたエジプト女王の顔が面白かった。カルタゴ時代の遺せきが人間に似ていた。それが石なのでびっくりもしました。そうだいなローマの水道のあとは、トンネルみたいだ。

木津川迪洽

二月二五日、世界のあゆみをかりた。村ができ、川や海や、山に住んで、木の実や、貝などをとりかえるようになっても、気の強いあばれんぼは、村をあらしまわって、木の実や、貝などをとりあげて、いばってくらしていた。さいごまで、戦争をおこそうとしているあばれんぼたちは、さいごに、王様とよばれるようになった。その次に、いばり出したのが、おぼうさんです。どうしていばれるようになったかというと村の人が神様を王様よりえらい人だと信じるようになったからです。それを、幸いにして、おぼうさんは、かみさまにいいことを言い、お金をまきあげてくらしていたのです。そしておぼうさんは、「米や、お金を持ってこないやつはくるな」と言っていばりました。

今村千歌子

大昔の生物という本を読もうとしたわけは、人間の祖先は大昔に生れた。人間の一番はじめは、人の形をしていなかったと思う。では、人間の初めの祖先は、サルだといっているが、サルの一番初めは何から生れたのか知りたかったからです。

長井喜美子

わたくしは、二月に、もののはじまり物語という本を読みました。はじめの汽車は小さいので、やねの上に、しがみついてのった。がたがたとはげしくゆれるので、屋根へしっかりとしがみついた。それでもめずらしさに、歯をむき出して笑っているようすは、とても、古い話だが、面白い、郵便のはじまりというのは、はじめは、飛脚屋がたのまれた小包や手紙をもってとどけた。走っていってつかれるだろうと思った。

あるおかあさんの感想

普通の物語とちがって、不思議なことばかりだし、ちょっとむずかしいわね。よくわかったかしら、あなたの感想は、「わたくしもそうしてみたい」というのが多いけれど、もう一度読んでごらんなさい。いろいろと、教えられることがありますよ。今は初めてだからしかたがありませんね。本がそうなっていたかも知れませんが、知っている漢字、ならった漢字は、全部使って下さい。かなばかりだと大変読みにくいです。三月七日夜。

大津勲

ぼくは、こんな本を読んだことがないので、早く読まれないので、ゆっくり読んだ。感想ばかり気になってしょうがなかった。でも、つづけていった。

宮田一夫

わたくしは、ろうどうくみあいを初めて作った人という本をよんだ。ぼうせき工場には、女工員が、七八十人も働いていた。みんな、二十才ぐらいで、中には、七つか、八つかぐらいの子もまじっていた。女工は、みんな工場のすぐそばにあるきしゅくしゃにすんでいた。そこでは、四じょう半ぐらいの部屋に八人もねていた。どうして、そんな部屋に、八人もねられるだろう。八人は、夜の組とひるの組に分れていた。七、八才の子供も工場につとめているのがふしぎであった。四じょう半で、一つのふとんに二人ねるのが、かわいそうだった。

小林伸子

わたくしは三週間の間、読んだり書いたりしながら、いろいろな本を読みました。むずかしいことばもあると思います。だけど、十人の発明家などとてもためになります。今からおよそ百五十年前のこと、ジョージ・スティブンソンという、十二、三才の子供が、炭こうに使われている。しかも、安い金で一日十四時間も働いている。そうしているうちに、四年五年六年とたつと、もう子供ではない、大人なんだからといって、一つの機械をこわしたり、作り変えたりしながら、一しょうけんめい

勉強する。そして後に、「てつどうの父」とよばれる。わたくしは、よく一つのものをあきずにやったと思いました。石の上にも三年というように、何ごともしんぼうが大切だとつくづく思いました。

久方照子

バッハは、千六百八十五年三月二十一日に、アイゼナッハで生まれました。バッハの家は代々音楽家で有名でした。また、キリスト教を深く信じていました。でも、十才で、父と母をなくしました。バッハは、夜、戸だなから、がくふをとり出して勉強していましたが、にいさんに見つけられて、そのがくふをストーブにもやされてしまいました。バッハはなみだを目にうかべてざんねんがりましたが、「よしそれなら、自分で曲をつくった方がよい。」ということに気がつきました。後に、バッハは、美しい音楽をひくようになりました。バッハは年とってめくらになりました。少年のとき、六カ月もかかって、月の光でがくふをうつしたために、目の力が弱くなったのだといわれています。えらい人は、はじめからきまっているのでなくて、みんな、勉強をつづけてきたからだと思いました。

学芸会をかえりみて

小川和子

こんどの学芸会は、みんないっしょうけんめいにやって、大変よかったけれど、見ている人が残念ながらふざけている人がいたから、もっと見ている人ががんばれば、もっときれいにできたと思った。今度の時は見る人がもっといっしょうけんめいにやったら、よい学芸会ができると思う。じぶんたちの出るばんに、ぶたいに行くとちゅう大きな声でさわぐ人がいるから、もっと静かにしたらよくなるんじゃないかと思いました。それから、一度まくを開けたら、すぐしめてしまわない方がよい。白鳥のおどりは、もっとながければもっとおもしろかったと思う。六年一組の男の子がやったのは、やる人がもっときちんとやった方が良いんじゃあないかと思った。だいみょうは、もっとしっかりと、いばる気でやった方が良いと思う。まちがえても言いなおさないで、そのままいったら、もっとよくなるんじゃないかと思いました。まくをしめる人は、みんなのげきや、うたがおわってからしめたらいいと思いました。それからマイクからはなれている人は大きな声でいわないと、うしろのほうまで聞えないから、できるだけ大きな声でいった方がよかった。太郎かじゃの時、みんながへんなことをいった人がいるから、みんないっしょうけんめいやっていることを考えて、そんなことは、言わない方がよいと思った。

学芸会について

今井登美子

わたくしは、二月十四日に学芸会を見た。その時ごごからだった。一二三年はごぜんにした。わたくしは、学芸会は見る勉強だ。それなのに四、五、六年はごごからだった。みんないっしょに見た方がよいと思った。その方がいろいろなげき場に行った時しずかにぎょうぎよく見られるんじゃないか、と思ったからだ。それから、ごごからだと、きょうは学芸会だ、と思って、おちおち勉強などしていられない。そんな時に、勉強していてもしょうがないし、頭に入らない。だからみんないっしょにしてもらいたいと思った。今度の学芸会は、歌が多かったと思った。でもげきのみかたと歌のみかたとは、ちがうかもしれないが、あまり、面白くなかった。四、五、六年でやったせいもあったが、げきがすくなかった、からだと思った。げきの中には、長いのもあったが、みじかいのが多かった。それに出てくる人がすくなかった。たとえば、「萩大名」は三人、「いなかっぺ」は、七人、こんどの学芸会は、十五人以上にしてもらいたい。でもじょうずだった。分校はたくさんだった。それなのに本校は一つしかやらなかった。わたくしはもっとやりたい。「思い出」だけでは、ものたりない。と思った。げきをやる時は、すじのとおるものを、やってもらいたい。でもまじめにしっかりとやって、ほかの人に、わらわれないものを、やればいいと思った。

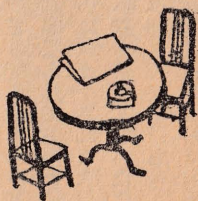
夏の虫

小林稔

夏の虫がとんでいる。
かぶと虫などがとんでいる。
ほかの虫もとんでいる。
ないている虫もいる。
かわいい声でないている。
すきとおった声でないている。
くわがた虫などもとんでいる。

五年

もうすぐ春だ

大野幹子

きょう経堂へ行く時、畑の道を通ったら麦が青々とのびていた。竹林の根もとはすっかりきれいにして、いつ竹の子が出て来ても良いようになっている。風がざわざわと木をゆらしているが、空は晴れてまっ青だ。電車のまどから見た家々ではたいていふとんをほしていた。そしてももの花や梅の木が次々に目に入って来た。わたくしはきのう来た小樽のお友達を思い出した。北海道でも、日あたりのよい所ではもう雪が消えて、ふきのとうの出ている所もあるそうだ。四月になれば、本当の春がやって来て、学校のさくらもさき、一年生も入って来る。そう

するとわたくしたちも、六年生だ遠足も修学旅行も始まるし、勉強もいそがしくなるだろうけれども、六年生になるのはとてもうれしいと思う。わたくしはそんなことを考えながら春のしたくをした。庭の土をたがやして、ダリアのきゅうこんをうえた。わたくしはわらばいを運んだりして手伝った。早くあたたかになって芽を出してくれればいいなあと思った。

水たまり

白水喜美子

おにわにできた水たまり
すんだお空をきれいに写す
そっとわたくしが顔を出す
こんどはわたしがきれいに写る
わたしがわらえば、水たまりもわらう
わたしがおこれば水たまりもおこる
そんなにまねしちゃイヤァヨ
花びらを落すと、おやおや
きれいな、きれいなはもんができた
わたしの顔も、お空のにじも雪のごてんも
みんなきれいなはもんになった
おやねのかわいいあまだれが
はもんに合せて歌い出す
わたしはごてんのおひめ様
オヤ、いたずら小風がふいて来た
ごてんの馬車も、七色の橋もみんなけして
とおりすぎちゃった
春の小風は、いたずら小風
わたくしの顔をなでて通る

初もうで

高山かおる

大みそかの夜、ガタン、ガタン、ゴトン。こんな音がしている。ここは電車の中で、明治神宮に行く人でにぎわっている。どの人の顔もみななごやかな顔だ。わたくしは今、おとうさんと明治神宮におまいりに行く途中だ。まもなく電車は参宮橋の駅についた。参宮橋の駅には紅白の幕が張られてあった。だらだら坂を登り大鳥居の所まで、きれいにほそうされた大通りが続いていた。通りのはしには、明るい露店が並んでいた。どの露店からも、客をよぶにぎやかな声が聞えて来る。ちっともお客のたかっていないおみくじ売りのおばさんが、ちょっとかわいそうだった。長い大通りを通り大鳥居をくぐってまもなく行くと、ボーイスカートの人が、かがり火をたいていた。大きな木がたくさんはえている暗い森に、まっかな火がたちのぼっているようすは、いかにも原始的な感じがする。ボーイスカートが日本人なので、ふしぎに思っておとうさんに聞いてみると、おとうさんのお話では、ボーイスカートというのは、少年団と

もいわれ、この人たちは神様やお国へ忠誠をつくしたり、他人のために役に立つようなことをしたり、また、心や体をきたえる子を三つのちかいとしている団体だそうだ。わたくしもお国や他人のためにつくしたり、外国人と話せたりするなら、はいってみたいと思った。でもボーイスカートですから、男の人だけで女は入れないのが残念です。島田を結ったおねえさんや、カメラをぶらさげた背の高いアメリカ人や、子供を連れたおかあさんたちといっしょにぞろぞろと歩いていった。しばらく行くとおとうさんが、「もう少したつとこの森は、満員になるんだよ。」とおっしゃった。こんな大きな森が人で満員になるとは、信心深い人がたくさんいるものだとおどろいた。長い参道を通りやっと神社についた。神社の中は参拝の人でにぎわっていた。ひどいざっとうの中にもまれて、つぶされそうにたったがやっと心の中で、「去年ぶじに過せましてありがとうございます。今年も無事に過せますようにお守り下さい。」と祈った。お金をおさいせん箱に入れてやっとのことで、ざっとうの中からぬけだしてきた。稚児さんのところでは、「まや。」をかった白い着物をきてひのはかまをはいている稚児さんの前にいると、なんとなくわたくしは何百年も昔の時代にかえったような、変な気持がした。アメリカ人が稚児さんを写していた。白い着物をきて、はかまをはいている稚児さんのすがたは、日本ふうなかんじがしてよいのだろう。まもなくまちかねていた十二時の除夜のかねがなった。たいこが五十一とラジオで放送しているかねが二つばかりきこえた。ボーイスカートの人が、「なんだ、あれが除夜のかねか。」と、いったよりにほんとうになさけない除夜のかねだった。ぐうぜんおにいさんたちといっしょになったためで、にぎやかに帰った。家に帰ったのは一時だった。

おとうさまの思い出

南光子

おとう様は、わたくしが五つの時なくなった。おとう様のお仕事は、戦線に行くわかい人たちに飛行機ののり方を教えるのだった。ところがうん悪く飛行機がつい落してけがをなさり、それから、病気になってしまった。そして長い入院生活をおくられた。また、おかあ様も、病気になり入院された。その間、わたくしはおばあ様の家でくらした。まもなく、おかあ様は退院されたが、おとう様はなくなってしまった。病院の車でおとう様のひつぎと一しょにやき場へ行ったのを今でもはっきりとおぼえている。おばあ様の家の近所におとう様に、そっくりの人がすんでいるが、その人を見るとおとう様ではないかと思うことさえある。両親のいるお友だちは、ほんとうに幸福だと思う。

子ぐまの白ちゃん

佐久間二美

ぼくは、おもちゃの白くまである。はじめは、おもちゃ屋の

ウインドにいたぼくだが、ある日、よそのおばさんにかわれていった。ぼくのきた家は大きな家だった。その家にはかわいい女の子がいる。その名はルミちゃんという名前だ。ルミちゃんは、ぼくのことをとてもかわいがってくれた。そしてぼくに名前をつけてくれた。その名は、白ちゃんだ。ルミちゃんはいつでも、ぼくをだいて、ねてくれる。ひるまはルミちゃんは学校に、行っていて、家にはいない。ぼくは一人で、ルミちゃんのつくえの上にすわっている。下のおもちゃ箱に、入っている。いろいろな人形がぼくの方をみて、しきりになにか話していた。やがてだれかがろうかをあるく足おとがきこえた。ルミちゃんは、しゅく題をすませると、すぐにぼくとあそんでくれた。ルミちゃんは、おかしをもってきて「白ちゃんおあがり」といって口のそばにもってきてくれた。だがぼくは食べられない。ほんとうに残念だ。ぼくも人間のように物を食べられたらいいなあと思った。

お手つだい

井上亮子

きょうは、おかあさんが買物に行った。出かけるのがおそかったので六時になっても帰って来ない。わたくしはおぜん台の用意をした。そういうことはできるが、ガスに火をつけたりすることはできない。わたくしはまだできないというのではなく、ガスに火をつけたことはないというのだ、それでわたくしはしばらくまごついたがだれにもやれないことはないと思って、おもいきってマッチをこすった。火をつけてみると、上へ燃え上ってくるのですぐ消してしまった。何ものかがわたくしにおそいかかってくるような気がした。それでも、もう一度つけてみた。三度目は一度目よりもだいぶなれて来た。まだ半分位火がついているだけだった。ガスは青白く燃え上がり、どんどんまわりに移って行く。ほんのちょっとの間にみんな火が移っていってしまった。わたくしは一つガスの性質を覚えた。しばらくすると、おかあさんが帰っていらっしゃった。わたくしはお手伝いをすると勉強に役立つこともあると思った。それからは、お手伝いをするのが好きになった。

おてつだい

福井真知子

きょうは、三十一日、としのくれなのだ。どこの家もいそがしいとみえて、だれも外に出て遊んでいる人などいない。家はことにいそがしい。もう一軒はなれが、きょうやっと建ったのだ。それに荷物がいっぱい京都のおばあさんの家から届いたのだ。おかあさんやおとうさんは、二階に荷物を運んだり、すすはらいをしたりして、とてもいそがしそうにしていらっしゃった。兄とわたくしと、妹は、新しい家に、ワックスをぬることになった。こんどの家は、洋間やろうかが多いので、とても大変です。ワックスというのは、板の間などをひからせて、きれいにつるつるになるように、ぬる物です。初めは、みんなでワックスのついたきれで、力を入れてキュッキュッと、こすった。だんだんゆかが光ってきたが、手もとてもいたくなった。おにいさんが、「よいしょ、よいしょ。」と、かけ声をかける。一時間ほどすると、妹が、「もうつかれちゃった。」と、いった。おかあさんが、「少し休んで、またやってもいいわよ。」と、おっしゃった。わたくしは、早くすましてしまおうと思ったので、おにいさんがおつかいにいってしまってからも、いっしょうけんめいみがいた。妹はあそんでばかりいるので、はらがたって、ぶってやろうと思ったけど、なかすと、また、おかあさんがこまってしまってお手伝いにならないから、おにいさんが帰ってきてから、おにいさんにいいつけることにした。おにいさんが、まもなく帰ってきた。妹のことをいうとおこるかと思っていたら、ひとつもおこらないで、「ちか子、いいこだからもうちょっとやってね。」といった。わたくしはやっぱりおにいさんだけあって喜んでやらせられるから、えらいなあと思った。それからおふろたきや、いろいろなお手伝いをした。あとから、手がとてもいたかった。おかあさんが、「きょうはみんなが協力してくれたので、ほんとに助かったわ。」と、食事の時おっしゃった。わたくしも自分自身よくやったなあと思った。

大好きなジロ

安田順玉

学校から帰ったら、朝つながれていたジロがいなかった。わたくしはおかあさんの所へ飛んで行った。おかあさんはせんたくをしていた。わたくしは、「ジロは、どこへ行ったの。いないのよ。」と、言ったら、おかあさんは、「ジロは、加寿子や輝成と多摩川に散歩に行ったんでしょう。」と、おっしゃった。わたくしは土手に登った。あたりを見まわしたら、人の影もなかった。また走り回って妹たちをさがした。橋の方へ行くと妹が、「おねえちゃーん。」と、手をふった。ジロもしっぽをふっていた。わたくしは、妹たちの方にまた走った。ジロの方に行って、「ジロ、ジロ、ジロ。」と、よんだ。ジロはわたくしのほっぺたをぺろぺろとなめて、いかにもうれしそうだった。家に帰って、また、ジロとあそんだ。ジロとかけっこをやった。妹と、弟はさきに走らせて次にわたくしが走った。一番後にジロが走った。けっ勝点は、電信柱にした。さきに走った妹と弟は、わたくしがおいぬいた。後二メートル位で、電信柱につくという所で、ジロにおいぬかれた。電信柱までくると、ジロはちゃっかりおすわりして、まっていた。みんなけっ勝点までくると、わたくしは、「一等ジロ選手。」と大声で言った。夕空が赤くなったころジロと、わたくしたちの影ははっきりと見えていた。

六年

ぼくが大きくなったら

三輪剛

ぼくが大きくなったら、人らしい人になりたいと思う。えらくなれなくてもよい。人らしい人になって日本のため、世界のためにつくしたい。世の中には金持だけど他の人のことを考えず、自分が良ければそれでよい、と考える人が、たくさんいる。ぼくは人らしい人、親切で他人のこともよく考える人になって世の中のためにつくして、一生を送ろうと思っている。

お寺の木

山崎章

ぼくは、泉竜寺の前を通る時、いつも古い木をみて大きいなあと思う。お寺の木はどれをみても大きく、立派な木ばかりで、雨にもまけず、風にもまけないで、いつも変らない姿ですくすくのびていく。ぼくたちはお寺の木にまけないで、どんなに苦しいときも悲しいときも大きな希望をもって生きて行き、正しいことをして死ねばだれも立派だと思う。

世界を平和にしたい

九戸方子

この地球上では、今どこの国も平和だとはいえない。どこかで必ず争いがおきている。その争いを止めさせて世界を平和にすることを考えなければならない。今そのために役立っているのは国際連合である。日本は去年の十二月に加盟したけど、まだまだ国際連合に加盟していない国々がある。

わたくしはこういうことをある日考えた。この地球上にある国々を一つの県として世界を一つの国とすればいいのではないだろうか。もしそうなれば国連に加盟しているの、いないのということは問題でなくなってくるだろう。しかし現実はどうであろう。今日本では「ストロンチュウム90」のことが問題になっている。今度イギリスでは原子爆弾の実験をするそうだが、それは絶対に反対である。もし今後実験をくりかえせば、死の灰のために人間が一人もいなくなる恐れが多分にある。

もし世界が一つの国とすれば原爆の死の灰もなくなり人々の心配はいらなくなり、逆に原子を平和に利用すれば、人々は幸福に暮して行けるのである。

世界を平和にするのはわたくしたちの仕事である。わたくしはきっと、きっと世界を平和に、何の争いもない平和な生活が営めるように努力したいと思う。

教室の中

塩沢春子

しーんとした教室の中。ストーブが何かぶつぶつと誰かと話をしている。だれだろう、相手は、ふとみると日直が消して行かなかったのか だれかがいたずらしたのだろうか、かがしの顔が黒板に書いてある。それとストーブとが話をしているのだ。水をうったような静けさの中で何事かしゃべっている。……「ぼくこのごろ体がいたいんだよ。」「どうして。」「生徒がぼくのおなかをつっつくんだよ。」「へーえ、いたいだろうね。ぼくなんか明日の朝になるとどうせ消されちゃうんだから平気だよ。」「いいなあ、ぼくなんか毎日いためつけられているんだからね。もっと大切にしてくれなくちゃこまるよ。ほんとに。」するとくちなしの花が花びんの中から、「わたしもこの前なんか男の子がわたしの葉をもぎとるのよ。」と、いった。するとストーブが、「それにくらべて女の子はやさしくしてくれるね。男の子の中にもそういう人もいるけど。」「けっきょく物を大切にしてほしいね。」「そうだそのことを黒板に書いておかない?」「あしたみんなが読んでくれるから。」「それがいいわ。すまないけどかかしさん手をのばして書いておいてくれない。この教室の生徒ももうすぐ卒業だし、中学へ行ってもこのことは守ってほしいから。」「よしきた。」かがしはすらすらと上手に書いた。……突然ボーン、ボーンと時計が七つ鳴った。夢だったのだ。変な夢だ、わたくしはゆうべ母に、「もっと物を大切にしなさい。」としかられたのを思い出した。わたくしは一人で考えてとても愉快な気がした。

原水爆実験をなぜするのだろう

畑野国興

ぼくはこのごろよく水爆の実験について新聞やラジオのニュースを聞く。イギリスではこんど、太平洋で水爆の実験をやるそうだが、なぜこのようなことをやるのだろう。第二次世界大戦で日本は原爆によるひがいを二度も受けているし、ついこの間死んだ久保山さんも水爆実験のために死んでしまった。イギリスでは一度だけ水爆実験をやったとしても、アメリカ、フランス、ソビエトで一回だといって、世界の国々が一回ずつやったとしたら、この地球はどうなるのだろう。おそらくこの地球は全滅してしまうだろう。水爆にはストロンチュウム90という幼児の体に入ったら、せきずいをやられるという。おそろしい死の灰に放射能がふくまれているそうだ。

イギリスでは日本がいくら水爆実験を止めてくれといっても、止めてくれるようすはない。このような実験をなぜやるのだろう。ぼくにはわからない、ぼくがもう少し大きくなったらわかるだろう。

愛犬テリー

川村敬志

ぼくの愛犬、その名を、「テリー。」という。朝になると、早くから、「わん、わん。」と、ぼくを呼ぶ。ぼくがテリーにご飯をやりにいくと、飛びついて来て顔をペロペロなめる。
学校から帰って来る足音を聞くと、小屋から飛び出して来て、しっぽをまるでとんぼをとるようにくるくる回しながら、飛びついて来る。散歩につれて行くとぼくの手がちぎれるぐらいにぐいぐいとくさりをひっぱる。くさりからはなしてやると、どこかえ一目さんに走り出し、ピイーと口ぶえをふくと土けむりを上げてとんでくる。そうしてぼくの洋服を口にくわえて家までひっぱっていく。テリーはほんとうにかわいいやつだ。

学校

井元林造

狛江第一小学校に転校して来たのは三年生の十月であった。この学校をはじめて見たとき、なんときたない学校だろうと思った。しかし前の学校とくらべると設備のよい点もあった。その一つはろうかに油をひいてあることだ。もう一つはストーブがあったことだ。
あれから三カ年、今はもう六年だ。この三カ年の間にずい分この学校もなおした。コンクリートで渡りろうかをぬり、屋根や、つくえや、いすもとりかえ、水道の設備までできた。
しかし、まだ設備でたりないところがたくさんある。ぼくが大きくなり、もし偉くなったら、この学校だけでなく、全国のもっと設備の悪い学校を立派にしてやりたい。きたない、そまつな、設備の悪い学校では生徒たちが思うように勉強ができなくてこまるだろう、だからだ。

卒業を間近にして

磯初枝

ついこの間、おかあさんに手をひかれて学校の門をくぐったと思ったのに、もういつの間にか最上級生になり、後二十日程で思い出の小学校六ヵ年の生活を終ろうとしています。
月日のたつのは早いものだということが実感となって　ひしひし身にせまります
今、目をとじて、この六ヵ年の生活をふりかえってみますと、さまざまな思い出が走馬燈のように、浮んでは消え消えては浮びます。母の日の運動会で、まだ一年生だったわたくしたちが、たどたどしいかっこうでおうまの親子の遊戯をしたこと、一年の時だったかハンカチを忘れて立たせられた時のはずかしかったこと、また、高尾山に登った時の苦しかったことなど、きのうのことのように今でもまざまざと心に浮かんで来ます。
しかし、そのなつかしい学校ともいよいよお別れかと思うと

ほんとうにさびしい気がします。
お友だちのように親しんで来た先生方や一しょに朝から晩まで学びそして遊んできた友だちとも別れなければなりません。
しかしわたくしたちの前途には新しい中学校三カ年の生活が待っています。
小学校で学んだいろいろなことを中学で生かすためにも、わたくしは今後一生けんめい勉強しなければならないと自分の心にちかい、そして将来社会の役に立つ人間になることがわたくしの進むべきただ一すじの道であると信じて努力するつもりです。

初春の多摩川

松尾精文

多摩川の風はつめたい
　水もつめたい
その流れの中に
　めだかがむれをつくり
水草の間を通りすぎる
　遠くにはかげろうがもえている
空のひばりも
　やがて鳴き出すだろう
万物よみがえる春が
　もうすぐそこにある

いとこ

青戸公子

わたくしのいとこは大勢いますが、特に仲のよいのは北千束の藤原さんきょうだいです。
進ちゃん、妙子ちゃん、武ちゃんの三人ですが、去年の夏休みの末におかあさんがなくなられたので、とてもお気の毒に思っています。妙子ちゃんは四年生でとってもお茶目でおしゃべりです。わたくしの家に来た時も自分の話したいことだけはどんどんしゃべりますが、あまり人の話を聞こうとはしません。妹の薫とは大の仲よしです。
武ちゃんは、切手きちがいといわれるほど切手集めに熱心でお年玉も全部切手につぎこんでしまうほどです。中央郵便局へもたびたび切手を買いに出かけるといっていました。
進ちゃんは、ことし一年生になりますが、さすがに男の子らしく、赤とかだいだいとか女の子の好むような色はだいきらいだそうです。
進ちゃんとわたくしとはとても仲がよいのですが、何しろ男の子らしくて、とても威張っているのですから、わたくしはいつもぺこぺこあやまらなければならない立場です。
このように藤原家の三人きょうだいはそれぞれ特徴のある個性を持っています。
そしてそれぞれの個性を思う存分発揮して、のびのびとくら

しています。
性格はちがっても、三人共とても仲がよいのです。
おかあさんを亡くしてからも三人はおとうさんを加えた四人で、元気な毎日を送っています。
わたくしはこのようないとこを持ったことをほこりに思い、わたくしも負けないように立派な中学生になろうと決心しています。

おばあさん

藤田誠治

遠い青森からはるばると
　おばあさんがやって来た
ぼくを見て省か、省かといった
　ぼくが、「省は弟だよ。」と、答えた
母も横から、「誠治ですよ。」と、おっしゃった
　おばあさんは
「ほー、誠治か、大きくなったな。」と
　ほんとうにおどろいたように
細い目をみひらいて
　にこにことわたくしに笑いかけた
おばあさんはとてもつかれていて
　夜は早くねてしまった
おばあさんが長く家にいてくれたら
　うんと大切にしてあげようと
心の中でひそかに誓った

卒業

松本庸子

雪はとけて
春はかけあしで
もう、そこまで来ている。
春になれば、うれしいことがたくさんある
その中の一つは、卒業だ。
六年も終り
またちがう世の中に出るのだ。
うれしい、うれしい
心が燃えるようだ。
友だちの顔からも
うれしいほのおがたちのぼっている
さあ、みんな、いっしょに
新しい世の中に出よう。

労働者

長谷川徹

学校へかよう途中、工事をしている所がある。そこには、大

勢の人がはたらいている。その中には、年おいた人や、女の人まで働いている。十メートルぐらいの深い、あなの中に重い荷車をひいていったり、大きな石をはこんでいったり、大勢の労働者がはたらいている。雨がふる日でも、つめたい氷のはる日でも、朝早くから働いている。まだここにやとわれている人はいいほうだ。ぜんぜん仕事がない人もいるそうだ。特に雨のふる日や雪のふる日などは仕事がないそうだ。どんなやり方をしているのか、ぼくには分らないが、もしぼくが労働大臣になれたら、まっさきにこういう職のない人をなくし、労働者を楽にさせてあげたい。そしたら、きっと住みよい日本になるんじゃないかと考えたりする。

ぼくたちの道

高木重雄

卒業しても道は遠い。
六カ年の楽しい生活も終る。
道は、ぼくたちをむかえてくれる。
夢を持ってその道を歩もう。
空より高い高い夢を持って、
歩くんだ。
まっしぐらに歩くんだ。
そうすれば
きっと、その道はどこまでもひらけるはずだ。
ぼくたちは青空をながめて歩くのだ。
美しい青空をながめて
しっかりと地に足をつけて
かたく足に根をはって、
歩もう
ぼくたちの遠い道を。

ぼくたちはこれからだ

長峰邦武

長くて短かいようだった六年間
いろいろなことのあった小学校
まるで汽車のまどから
景色を見ているように。
どんどん変った六年間
卒業をまぢかにしている
ぼくたちはなんだかあっけないように感じる
卒業して
もうみんなと会えないように
思うとほんとうに
つまらなく思う。が、
ぼくたちは、
まだ人生の半分にもいたらない
ぼくたちはこれからなのだ。

春を呼ぶもの

斎藤京子

雨あがりのやわらかい土
まっ黒な、ぬくみをもった、
やわらかい土。
そんな土が形づくると
春がくる。
水色の小さい、小さい花
まるでこの空のかけらのような
かわいい花。
そんな花が開くと、
春がくる。
あぜ道のよこの小川も
ちょろちょろ
まるで秋の大気のような水が
ふき上がる。
そんな水がわき出すと、
春がくる。

土方

後藤雅子

家の前の　つきあたりに
高さ、四メートル位の道が、もり上がっている。
多摩川の橋と、つなげるのだろう。
朝早くから飯場に、土方が来て
工事をしている。
天気のよい、きょうは（七時半頃）
べん当づつみをかかえてさっそく来ていた。
古びた、ずぼん、たびなどに身をこなし、
人々は、それぞれ仕組に、とりかかっていた。
体はがっちりとし、顔形は朝鮮風である。
目の下の出っぱっているほねが、
今までの、なんぎを、物語ってくれた。
……学校から帰って来る頃（三時半）
土方がぽつ〳〵帰って行く。
ほっとした顔には、あせがてか〳〵と、
光っていた。ぶじであったのを、喜んでいる者
でもそのかげには、仕事ができなくて、
しょんぼり帰って行く人々のすがた。
心の中は、倍に、くもっていることだろう。

朝

桑原茂子

父に起こされて時計を見ると六時すぎていた。「そうだ！きょうは早く起きて母の手伝いをするのだ。」と思うと寒さを忘

れてとび起きた。母はもう起きて台所でガタガタ働いている様子、洋服を着ながら窓をあけすがすがしい朝の風を入れた。東の空にはもう陽がまぶしいくらい照っていた。洋服を着て外へ出ると、梅の花は咲きはじめ、新しい芽をだしはじめていた。もう春だ。歯をみがきながらあたりを見回して思った。「さあ、これから仕事だ。」と。走って台所に入った。わたくしには何からやりはじめてよいか分らなかった。まず、自分のことと、自分の仕事としてきめられていることをやるのだと思い、わたくしはげん関の掃除をして神様にお水をあげ、おまいりをすませた。かみをとかしていると、母はもう朝飯の準備を終えてわたくしたちの食卓にくるのを待っていた。「なんだ、ちっとも母の仕事を手伝わなかったわ。」と、思いながら、皆で朝の食事をすませた。

わたくしはちらっと父と母の顔を見たことに気がついた。

わたくしたちの六カ年略史

第一学年

四月△入学式　受持の小林先生や、やさしい六年生にむかえられたわたくしたちは、こうふんでほほをまっかにしていた。

五月△向ヶ丘に遠足　雨を心配していったはじめての遠足おべんとうの時は先生をとりっこ。△小運動会　おりがみひろいの時より、ずっとおねえさん、おにいさんらしくなり、白い体そう着を光らせて。

十月△大運動会　ひんやりとした、土をふみしめ、十月の空に大声で歌ったことを……。

三月△学芸会　三組いっしょに二つのげきをやった。あかるいライトに目をほそくして……。

第二学年

四月△遠足　三組はいつもまいごがないと、いわれつかれた足を、きゅうに、ピンとしてしまった。

五月△小運動会　一生けんめい、かけ、ひき、はしり、おかあさん方はわたくしたちを二年生と思って下さい。

十月△遠足・大運動会　一年生のかけっこを上級生として見ていた。たのしい思い出も二年生ごろから生れるのだろう。

第三学年

四月△遠足　つきそいなしで行く子も、多くなり都会の大通りを一生けんめい、歩いていった。

五月△小運動会　あの時やった、すずわりの美しさを今もなお忘れることができない。

十月△遠足　村山貯水地の青い水に目をみはり、長い道を、つかれたも、いわず歩いた。

三月△学芸会　先生のかわることがわかったわたくしたちは一生けんめいやった。（小林先生は病気でいらっしゃらなかった）

第四学年

四月△遠足　つきそいの人はみんな悲めいをあげてケーブルカーにのった。あの時の痛快さ……。

五月△小運動会　図画の先生が入られ、わたくしたちは一生け

んめいかけた。
十月△大運動会　五年生のあと掃除を見て、ちらかすもんじゃないなあ。とつくづく考えた。
三月△学芸会　かなめ先生に教えていただいた。「夕鶴」は、おかあさん方も、感心したと言っていた。

第五学年

四月△遠足　かなめ先生とのはじめての遠足。いっしょに遊んだ思い出は、はっきり頭にきざみこまれた。
五月△小運動会　小さい子の世話は五年生がやった。
十月△大運動会　五年生のやる役は、いっそうふえて運動会も、いそがしいものになってくる。
三月△学芸会　かなめ先生は一年生のきゃく本にいそがしくて、わたくしたちにはいささか練習不足であったがそれでも、みんな一生けんめい。

第六学年

四月△遠足　たのしい遠足とはこういうものか。最上級生になったわたくしたちは、箱根に行ったのである。
五月△小運動会　あと掃除をさせられたけどそれはつらいものでなく、かえって楽しいものであった。
十月△大運動会　最後の運動会。かけっこは、能力によって分けたので、おそい人も一等がとれて楽しかった。
二月△学芸会　三日というみじかい練習でもわたくしたちは声をそろえて六年としてはずかしくないものにした。
三月△卒業式　卒業式はさびしいらしいということは知っていてもさびしい。ということを知らなかったわたくしたちは今それをはじめてあじわうのである。

編集後記（あとがき）

○わたくしたちの文集「いずみ」ができ上がりました。こんこんとわいてつきないわたくしたちの思いが、いろいろのかたちでこの文集にあつまりました。実にたのしいことです。
　昨年の第一号より充実してきたような気がします。学芸会や卒業式や、と三学期はほんとうにいそがしい学期ですが、先生方も気持よくご協力して下さいました。
○この「いずみ」にあるお友だちの作品をときどき、ひっぱり出して見て下さい。そしていろいろと話しかけて見て下さい。この作品もきっと喜んであなたに話しかけてくれることでしょう。どうぞ、これからもよいお友だちとして育てていって下さい。

いずみ　第二号　（非売品）

昭和三十二年三月　九日　編集
昭和三十二年三月廿三日　発行

編集　狛江第一小学校　国語研究部
発行　狛江第一小学校長　高橋義彦
印刷　荒川区日暮里町二ノ一二九　帝都印刷株式会社　電話(89)〇九五三・三五八六番